

支部見聞録（関西支部）

From 和歌山



日本とトルコ 友好の礎を築いた串本

世界の中でも特に親日感情が強いといわれるトルコの国。その親しみの底には、実は120年前に本州最南端の町、串本の紀伊大島で起きたトルコ軍艦遭難事件が大きく寄与していた。南紀・串本へ、エルトゥールル号と大島の人々の物語を訪ねよう。

▲朝日に映える榎野崎灯台とアタテュルク像

トルコの教科書に載っているエルトゥールル号遭難事件

南紀・串本の港から海を隔てて約1.8km、急峻な岩壁に囲まれて浮かぶ大島。その東端にある榎野崎には、トルコの軍艦エルトゥールル号遭難者の慰霊碑やトルコ記念館、トルコ共和国アタテュルク大統領の像がたたずむ。周囲26kmほどの小さなこの島に日本とトルコとの友好の絆が印されているのは、120年ほどの昔、この地の人々が献身的にエルトゥールル号遭難者の救難救護に当たったことによる。エルトゥールル号は、トルコ帝国の使節団を乗せて来日。折からの台風による暴風雨の中で難破したのは、明治天皇に拝謁して親書を手渡した帰途のことだった。

当時この事件は日本中から関心を寄せられた。乗員への多額の義援金が集められ、生存者は手厚く遇され、日本の軍艦によってトルコに送り届けられたのだ。このことは日本では時の流れの中で次第に風化していったが、トルコの人々は忘れなかった。小学校の教科書や海軍史の書籍に大きく取り上げられ、トルコでは誰もが今もこの出来事を知っているという。1985（昭和60）年イラン・イラク戦争下、215名の日本人がテヘランに

取り残されそうになった時、トルコ航空機が救出してくれたことがあった。これも、さかのぼればエルトゥールル号によって結ばれた両国の絆があったからだといわれている。トルコと日



▲大島のトルコ記念館

本の友情の礎となり、トルコの人々の心に今も親日の情を抱かせる、エルトゥールル号遭難に端を発する友好のドラマ。榎野の名もなき人々の献身的な働きが、そのドラマの幕を開けたのだ。

かつて当たり前だった“利他”“助け合い”の精神を再び

いったいどれほどの高さがあるのだろうか、30mか40mか…。トルコ記念館のテラスから見下ろせば、険しい岩壁の下に太平洋の荒波が砕け散り、いくつもの岩礁が海の中から頭をのぞかせているのが見える。1890（明治23）年9月16日夜半、このうちいちばん向こう側の岩礁にエルトゥールル号は座礁し、真っ二つに折れた。乗員600余名中、生存者は69名のみ。榎野の集落では総出で救難に当たったが、海辺との行き来には崖伝いの細い急坂があるのみで、重傷者は背負ってかつぎ上げるしかない。住民たちは遭難者のためになけなしの食糧や衣類を供出し、当時貴重だった鶏もつぶした。遺体の搜索も丹念に行って現在の慰霊碑のある場所に葬ったという。

今から13年ほど前、地元の寺から当時の文書が発見された。島の3人の医者が書いた救出者の診断書とともに、かかった費用

▲岩壁間近、エルトゥールル号が座礁した現場

取材・写真協力／串本町、NPO法人エルトゥールルが世界を救う



▲救助された69名の乗員は、神戸の病院で手厚い看護を受けた。一緒に写っているのは、看護婦と宮内省などの関係者

の請求を促してきた日本やトルコ政府への返答の写しもあり、そこには「元々金をもらうつもりはない、そうした金があれば遭難者にあげてほしい」と書かれていた。

「これには正直、驚きました」。

そう語るのには申本町長の田嶋勝正さんだ。当時の樫野は60戸の小さな集落。今でこそ大島と申本の間に橋もかかり立派な道路もあるが、当時は本当につまみ暮らしだったはずだからだ。

「昔の日本人は当たり前のようにそうした気骨や利他の精神を持っていたのでしょう。樫野が特に偉いというのではなく他の土地でも同じ行動をとったでしょうが、120年経って時代が変わった今、改めて見直すべき精神ではないかと思います」。

樫野崎では事件後すぐ地元の人々が慰霊碑を建立して慰霊祭が行われ、それを知ったトルコ共和国のアタテュルク初代大統領が1937（昭和12）年に現在の石造りの碑に建て替えた。慰霊祭は5年に一度トルコからの参列者を迎えて今日まで続けられている。大島の小学生たちが碑の周辺を清掃し、戦後作られた鎮魂歌を今も歌い継いでいるという。

「絆って、そう簡単にできるものではありません。そうした積み重ねがあって今に続いているのです。だからこの地に生まれ育った者として私たちも後世に伝え、広める努力をしなければ」と田嶋町長は語ってくれた。



▲完成した慰霊碑の前に立つ第一通報者（建立直後）



▲2010（平成22）年に行われた、トルコから賓客を迎えての120周年式典の様子
アタテュルク像除幕式（左下）と地元大島小学校児童による献花（右下）

友好と親善、さらに平和を夢見てエルトゥールルを明日への礎に



▲浦 聖治理事長

こうした思いや広報の地道な努力は、今少しくつつ実を結びつつある。かつて申本の人にしか知られていなかったエルトゥールルの話は、ここ10年ほどで和歌山県内では周知のものとなり、全国的にも知名度を上げつつある。雑誌には特集が組まれ、教科書にも取り上げられる運びだ。また、トルコとの協力のもとで映画化の話が実現へ動き始め、エルトゥールルの精神を世に広めようとNPO法人も設立された。理事長を務める浦聖治さんは、「当初は映画の実現を目的にNPOの設立準備を進めていましたが、そのうち映画は手段で目的は他にあると気づきました」と語る。異国の見も知らぬ人々を何の見返りも求めずに樫野の漁民たちが助けたように、人は助け合うDNAを持っている。人類が今残っているのはそのおかげなのではないか。エルトゥールルの話を広めることで、少しでもそのDNAを人々の心に呼び覚ましたい、それが第一の目的だと浦さんは考えている。

「それからもう一つ、これからの世界の平和や幸福を築いていくには、これまでのような西欧的な競争原理ではなく、アジア的な共生や和の精神が鍵になるのではないかと思います。助け合いで結ばれた、アジアの極西にあるトルコと極東の日本が手を取り合えば、きっとそのための大きな力になれると思います」

設立したNPO法人「エルトゥールルが世界を救う」という名称には、そんな思いがこめられているのだという。未曾有の海難事故に端を発してトルコとの友好と親善の礎となったエルトゥールルの物語。これからも人々の心に感動とさまざまな思いを刻み、豊かな実りを世の中にもたらしていくに違いない。

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください！

<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>



和歌山の県魚マダコ。迫力ある市場や生け簀の見学を写真を交えて紹介しています。



▲トルコによるエルトゥールル号遺品発掘調査の成果を展示した和歌山県立博物館特別展。手前は同号の模型